運動推進 NEWS

まちづくり６０年　そして未来へ

令和3年1～3月号 第208号
（令和3年3月31日）

公益社団法人 東京のあすを創る協会
中央区八重洲2-11-7 東栄八重洲ビル6階
Tel 03-3272-0213　Fax 03-3272-1257
Eメール tou-asu@netjoy.ne.jp

TOKYO・今

◆新型コロナウイルス感染、収束せず

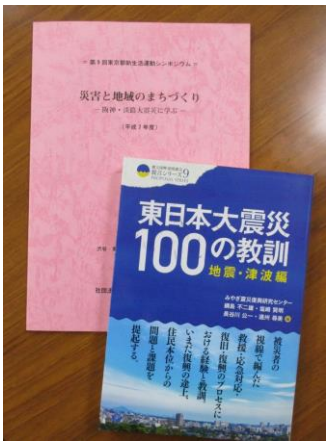
今年も桜の開花を期待して
新宿御苑に行きましたが…

「新型コロナウイルスの感染拡大～オリンピック・パラリンピックが延期に」（令和2年3月号）というタイトルの記事を運動推進NEWSに書いてから、早くも1年が経過しました。しかし、まだ感染は終息せず、二度にわたる緊急事態宣言によっても感染は減少、増加を繰り返し現在に至っています。その収束には、多くの人たちへのワクチン接種による免疫向上を待たなければならないようです。

1年延期されたオリンピック・パラリンピックも開催が近づき、3月26日には全国各地を巡る聖火リレーがスタートしました。その一方で、社会全体がいまだ感染防止のための停滞を余儀なくされています。生活学校、生活会議等の地域活動、イベント開催も多くが実施できずにいます。東創協の事業も、秋に予定していた都民フォーラムから、3月に予定していた運動推進大会に至るまで中止とせざるを得ませんでした。

これまで全世界では、1億2673万人が感染し、277万人余りの命が奪われ、日本においても46万9782人が感染し、既に9079人が亡くなっています（3月28日現在）。ウイルス感染による未曽有の恐怖に晒されている現状では、まだまだ耐え忍ぶしか手はありません。何よりも自らの感染を防ぎ、そして命を守るために、今しばらく感染防御を続けて、本当の「春」を待ちましょう。

◆コロナ禍、そして東日本大震災から10年



「東日本大震災100の教訓」（市販本）
「災害と地域のまちづくり」（平成7年シンポジウム記録集）

災害とは、自然現象や人為的な原因によって、人命や社会生活に被害が生じる事態を指しますが、今般の新型コロナウイルスによる感染爆発は、文字通りの「災害」です。そして、関連死を含めて2万2000人余の命を奪った「災害」である東日本大震災も、今年で10年が経過しました。

未知のウイルスによる感染爆発や地震災害のみならず、「異常気象」という言葉を最近は頻繁に聞きますが、この「異常気象」とは一般に、過去に経験した現象から大きく外れた現象で、人が一生の間にまれにしか経験しない現象のこと、と定義されています。考えてみると、この「一生の間にまれにしか経験しない現象」を、私たちは10年前に東日本大震災、加えて福島原発事故に遭遇し、そして今、新型コロナウイルス感染の渦中にいます。さらに、もう少し時間軸を遡れば、26年前の阪神・淡路大震災（1995年）も入ってきます。これに加えて80歳を超える高齢者の方々には、更に広島、長崎での原爆、太平洋戦争の惨禍が入ってきます。「まれにしか経験しない」現象が、昨今、頻発にしているように思うのは、私だけでしょうか。

よく言われる、「天災は忘れた頃にやってくる」という戒めの言葉があります。人間だれしも自らに災禍が降り注ぐことをイメージすることを忌避してしまいます。それは、日々前向きに生きていくために備わった潜在的な能力がそうさせているのかも知れません。毎日、地震カミナリ火事・・・ばかりを気にして生きることはできません。うがった見方をすれば、地球上の生態系の頂点に立つ人類だからこそ失ってしまった、五感プラスアルファの能力の退化のせいかもしれません。自然界の動植物は、熾烈な生存競争を生き残るために、常に五感を鋭敏に研ぎ澄ましているのです。私たちも、少し鈍ってしまった五感を補うために過去の知見のみならず、人類が営々と築いてきた知識と知能を総動員して備える必要がありそうです。

そして、「自然災害はいつも新しい顔をしてやってくる」とも言われます。東日本大震災では「津波」が命を奪いました。阪神・淡路大震災では「家屋倒壊」により、そして関東大震災では「火災」で10万人を超える命が奪われました。10年前、東北地方沿岸を襲った大津波は、過去の教訓により築造された岩手県・田老の長大な防潮堤を軽々と乗り越えてしまいました。福島第一原子力発電所の全電源喪失、そして原子炉溶解を起こしました。「備えあれば憂いなし」と言いますが、それは過去の経験を糧に備えるだけでなく、想像力を駆使した被害想定に対する備えが求められます。それが、「人が一生の間にまれにしか経験しない現象」をたびたび経験した私たちがやるべき役目なのかもしれません。

TOKYO・今

◆東京のあすを考える～カーボンゼロを目指して

BS世界のドキュメンタリー**「薄氷のシベリア　温暖化への警告」**という番組を見ました。広大なシベリアの永久凍土の中に数千年にわたって閉じ込められていた動植物の死骸、骨が、凍土が溶け出しことにより出現したり、メタンガスや炭素が大気に放出されて至る所で大地が陥没している様子を見て心底驚かされました。地球温暖化に関しては、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の警告もあり、全地球での今すぐの対策が求められていることは承知していましたが、いま一つ実感がなく差し迫った危機感は持てなかったのですが、この映像ではじめてその危機を実感させられました。

地球規模の新型ウイルスの感染や地震などの自然災害は、差し迫った脅威として早急な対策を講じなければなりません。一方、日々の暮らしの中で、少しずつ蝕まれていくと思われた地球温暖化の問題も、現実的には加速度的に進行していて、今や差し迫った問題として早急な対応が必要になっているのです。

スウェーデンの年若い環境活動家グレタ・トゥーンベリさんの言動、行動に象徴されるように、今、差し迫った危機は生じていないが、10年、20年、50年、100年後を生きる子、孫、ひ孫世代に受け渡すべき環境のことを、私たちは今すぐに考え、行動に移さなければなりません。そして、「東京のあすを創る」ということは、住み続けられる地球、自然豊かな日本、そして安心して住める東京を確実に残すことです。現在、東京都では「ゼロエミッション東京戦略」（右欄）を策定して、様々なプログラムの実施を図って行こうとしています。東創協としても、活動団体の関連した取組みに対する支援とともに、啓蒙啓発にも積極的に取り組んで行きたいと考えています。

<ゼロエミッション東京戦略>

世界全体がかつてない変革を求められる歴史転換点「パラダイムシフト」にある今、「脱炭素化」に向けて、国に先駆けた都市や企業の動きが世界中で活発化しています。東京都は一昨年5月、大都市の責務として、平均気温を1.5℃に抑えることを追求し、2050年に CO_2 排出実質ゼロに貢献する「ゼロエミッション東京」を実現することを宣言しました。12月には、その実現に向けたビジョンと具体的な取組・ロードマップをまとめた「ゼロエミッション東京戦略」を策定しました。

＊ 普段使わない言葉が、散見されますので、簡単に翻訳してみます。

○**パラダイムシフト**（paradigm shift）　科学、学術分野において、「革命的転換」を意味する語として使われていた言葉で、パラダイム（枠組み）をシフト（革命的、劇的に大きく転換）すること。

○**ゼロ・エミッション**（zero emission）　環境を汚染したり、気候を混乱させる廃棄物を排出（エミッション）しないエンジン、モーター、しくみ、または、その他のエネルギー源を指す。

大田区「区長を囲む意見交換会」

昨年12月21日、大田区生活学校連絡協議会による毎年恒例の「区長を囲む意見交換会」が大田区池上会館を会場として開催されました。新型コロナウイルスの感染拡大もあり開催が危ぶまれましたが、矢野会長はじめ関係者の尽力と松原区長の配慮もあり無事に開催されました。松原区長からは、現下の厳しい新型コロナ感染拡大に対する区の対策、そして新年度の予算方針について、会員の不安の解消に役立つような丁寧な説明がありました。さらに、区政に関する質疑応答も行われました。

北区「あすか生活学校見学会」

3月25日、北区のあすか生活学校の皆さんが、江戸時代より桜の名所で有名な飛鳥山公園にある北区飛鳥山博物館内に設けられている「渋沢×北区晴天を衝け　大河ドラマ館」の見学会が開催されました。当日は、文字通りの満開の桜の下という絶好の日和でしたが、飛鳥山公園の地に住んでいた渋沢栄一の偉業に触れつつ、現在放映中の大河ドラマ「晴天を衝け」で使われた衣装なども興味深く見学することができ、しばしコロナ禍から解き放たれた時間を過ごせたようです。

桜咲く上野公園点描（3/23）

一方通行化された桜並木の通り

今年のお花見は「歩きながら」です

▽ひとこと　新型コロナウイルスの感染拡大が止まらない中で、東日本大震災から10年という節目を迎え、自然災害の脅威についてあらためて考えさせられました。未知のウイルス感染症、首都直下地震、南海巨大トラフ地震への備え、気候変動をもたらす地球温暖化対策としての脱炭素社会の構築など、今、突きつけられている課題は、大きく、広く、深いためにその対応は、世界、国家レベルの取組みになります。それは、英知を結集してもなお困難な課題です。そして、その解決のためには全世界の国々、更には一人ひとりの国民、住民がこぞって参加しなければ、成し遂げることは不可能です。今回、カーボンゼロ、ゼロエミッション等々の取組みを調べて感じたことの一つが、身近でできることが実は大きな成果をもたらすのではないかということ。東日本大震災後の電力逼迫時に行われた省電力、省エネの国民こぞっての取組みを思い出しましょう。10年が経過して、今はどうなっているでしょうか。皮肉にもコロナ禍で人の行き来が絶えて、飛行機は飛ばず、旅行もできないため、カーボンゼロに向けて大きな貢献となっています。歴史を辿れば、ヒントが見えてきそうです。　（竜）